10月「Im Nebel」
アントニア・シュルト

1.

ドイツの秋と日本の秋は違います。

晴れた日でも、わずかな涼しさが感じられることと、その青空を背景に異彩ある紅葉が私にとって日本の秋というものです。それに対して、ドイツでは秋は雨がよく降るシーズンです。朝霧や蜘蛛の巣や旅鳥の集まりなどがよく見られる季節でもあり、何より陰鬱が始まる時期です。10月には木々はまだ秋つ葉が残っている状態ですが、雨や秋の風の影響で、落ち葉がどんどん増えてきます。ドイツにいたとき、これから秋が来るのがいつも少し怖いと思った気持ちをよく覚えています。暗くて、寒いので周りの自然がまるで死んでいるかのように見えます。日本の秋はそんな感じではないと分かっていますが、その気持ちをよく表す私の大好きなドイツの作家によって書かれた詩を最近思い出しました。

10月「Im Nebel」
アントニア・シュルト

2.

ヘルマン・ヘッセという人物が日本は主に小説で知られていると思いますが、実は詩もたくさん書いています。その中の一つを部分的に紹介したいと思います：

「霧の中」

霧の中をさすらうことのふしぎさよ！

茂みも石もそれぞれ孤独に

どの木もほかの木を見ることなく、

すべての物がみんなひとりだ。

というのは一つ目の詩句です。

10月「Im Nebel」
アントニア・シュルト

3.

詩や文学、もっと広く考えれば、芸術の解釈はもちろん自由ですが、ヘッセ氏が描いた霧が本当の霧ではなく、私達人間が何も知らず、見えずに不思議な世界の中を迷い歩いていることを表現しているのではないか。木々や茂みなどを人間として考えてみたら、その詩の少し沈んだ意味が見えてくると思います。「みんなはひとりだ。」

ヘッセ氏がその詩を書いたのは1905年でした。ということはヘッセ氏がまだ30歳ではなかったころでした。どれほど寂しかっただろうと思いながら、日本の色彩豊かな秋を迎えています。